

なつて、廃刊に至るまで五〇本以上のエッセイを寄稿していた。一見して異なる方向性のようなが、宗教に基づく社会変革には旧来の仏教を刷新することが不可欠であり、その推進力となるのは科学ではなく、「宗教心」であると理解されていたのである。

アメリカから日本を眺め、また欧米における「東洋」理解を知るといふ経験はまた、西洋と対等の東洋、という越境的視点を鈴木に抱かせることになった。東アジアの大乗仏教についてまだ評価の低かった欧米へ向けて、あらたに大乗仏教の意義を説いていこうとする宣教師的使命感を強く抱くようになる。かくして、英語で大乗経論や東洋思想を紹介するエッセイが次々と著されるようになる。

アメリカにおける神智学的な「仏教」観、「原始仏教」の重視など、日本と異なる「仏教」受容をみて、鈴木はいわば対機説法的な方法で次々とエッセイや著作を生み出した。その対機説法的言説に現れるのは、「個体的、事理的、分別的」な「西洋」と「没入的、瞑想的、直覚的」な「東洋」であり、それらはのちの「日本的霊性」論や精神分析の援用を彷彿とさせるものがある。しかし彼は東洋対西洋という二元論に終始するだけでなく、東西に共通する「理」を見いだそうとする。そこから、禅や華嚴の哲学と、スウェーデンボルグやキリスト教神秘主義を同時にみる「発見」があったのである。

今日、「大乗仏教と禅の西洋への紹介者」といわれる鈴木は原型は、このようにアメリカ時代に培われたのだが、彼が仏教学者としてではなく、仏教者として数多くの言説を著したこと

は留意すべきである。サンスクリットやパーリ、チベット語を操るアカデミックなテキストの分析が主眼なのではなく、ジェームズらによって言説化された「宗教心」に基づいて、宗教的経験を表現するための宗教言語の模索こそ鈴木が目指すところであつたのだ。この饒舌な不立文字というべき彼の宗教的求道は、近代における「仏教変革」の貴重な実験として、大きな思想的意味をもつといえるのであり、その揺籃期がアメリカ滞在の時期であつたといえる。

パネルの主旨とまとめ

吉 永 進 一

明治期における日本仏教の国際化は、すでに移民と仏教、植民地と布教といった文脈で論じられてきているが、ここでは仏教の「輸出」「輸入」といった一方向的な運動ではなく、同時多発的に変貌していった欧米の宗教状況との相互影響関係という複眼的な視点から近代仏教史を捉えなおしたい。十九世紀の欧米において仏教への関心の背景には、支配的なキリスト教組織に批判的なスタンスをとる、新たな霊性思想を奉じる人々がいた。具体的に言えば、秘教的なスウェーデンボルグ主義者、神智学徒、あるいはユニテリアンなどである。彼らはすでに仏教について一定の理解と誤解をもち、そこに合理性と道徳性を備えた理想的な宗教を見出した。日本仏教が、一方で西洋哲学

パネル

や東洋学によって「普遍」に接合されたとすれば、他方では神智学やユニテリアンによってどのような「普遍」に接合されたか。そのような場においては、表面的なアイデアの貸借というよりも、むしろ創造的な新たな宗教解釈が起こっていたはずである。それはどういう形態をとり、どういう変貌を仏教にもたらしたのか。本パネルでは、このような欧米の仏教同情者を視野に収めつつ、従来明示的に論じられてこなかった、近代日本仏教における四つの対話の事例を取り上げた。吉永は、明治二〇年代における、仏耶対立の時代から仏耶融和の時代背景の変化の中の神智学の仏教運動への影響を論じ、高橋の発表では元真宗僧侶で仏教演説家からユニテリアンに入った佐治實然による、ユニテリアンを通じての仏教把握が取り上げられ、安藤の発表では景教と真言密教との歴史的関係を「論証」したゴールドン夫人を論じ、守屋は鈴木大拙におけるアメリカ経験の意味をアメリカ側の「仏教者」が何者であったかを考察に含めつつ、東洋と西洋、学術と宗教の間における大拙のアンビヴァレントな位置について論じた。

これらの発表について、コメンテータの石井より以下のような意見が発せられた。吉永の発表については、神智学と日本仏教は互いに誤解した上で相互利用していたという点が重要ではないか、高橋の発表については、佐治の処女作が反キリスト教文献『破邪訣』であったことを指摘した上で、ユニテリアンに参加した背景に佐治の真宗理解の変化があったのではないかという指摘があった。ゴールドン夫人については、『大乘起信論』の英訳者ティモシー・リチャードとの交友が彼女の仏教理解に

どのような影響を及ぼしたか、また守屋の発表に関しては、大拙の科学的宗教から科学主義批判への転回の意義と、大拙のライバルであった井上秀天の科学的宗教観との比較の必要性など、今後の研究にかかわる広範囲にわたる指摘や意見が提出された。なかでも今後の考究にとって重要と思われる指摘は二点あった。ひとつは仏教近代化における『大乘起信論』の重要性であり、「真如」論を介して、T・リチャード、鈴木大拙、佐治實然といった横断的な比較にもつながる。パネル全体については、日本対欧米という二分法について、そもそも「日本」とはどこまでの範囲を指すのか、あるいは対欧米だけでなくアジア諸国との関係や比較も重要ではないかという指摘があり、スリランカの仏教近代化との対比は有効であろうと思われる。また、フロアからは、欧米と一括りにしているが、東洋学の先進地であるヨーロッパとアメリカの間には、当然差があるのではないかという質問も出された。これは学術と信仰、東洋学と神智学の関係という問題にもつながり、知識人宗教としての近代仏教のありようを考える上では避けて通れない問題であろう。